

第1回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

- (1) 教育長挨拶
- (2) 社会教育委員の自己紹介
- (3) 議長・副議長の選出について
- (4) 協議事項（事務局説明）
「今期の社会教育委員会議の協議テーマ」について
- (5) 連絡事項

2 日時

令和7年(2025年)9月1日(月)15時00分～17時00分

3 場所

S T V北2条ビル4階 教育委員会 委員会会議室

4 出席者

- (1) 委員（出席10名）
船着委員、齋藤委員、高原委員、中野委員、今泉委員、桑原委員、
榊委員、細川委員、片岡委員、出口委員
- (2) 事務局（9名）
井上総務部長、新津生涯学習推進課長、
早坂生涯学習係長、上原社会教育担当係長
大山職員、荒木職員、佐藤職員、橋本職員、野上職員

5 開催形態

公開（マスコミ関係者：北海道通信社1名）

6 会議内容

【配布資料】資料1：今期の社会教育委員会議の協議テーマについて
資料2：札幌市生涯学習推進構想について
資料3：「生涯学習と社会教育について」
資料4：座席表
資料5：札幌市社会教育委員条例
資料6：札幌市社会教育委員条例施行規則
資料7：社会教育委員名簿

- (1) 教育長挨拶
会議に先立ち山根教育長より挨拶
- (2) 社会教育委員の自己紹介

令和7年7月1日より新たな任期が開始となったため、新たに就任した委員含む全員より挨拶

(3) 議長・副議長の選出について

委員の互選により、議長に出口委員、副議長に片岡委員を選出した。

(4) 協議事項「今期の社会教育委員会議の協議テーマ」について

ア 事務局より、資料1「今期の社会教育委員会議の協議テーマについて」を用いて提案（上原係長）

以下、説明の要旨

- ・テーマ案「第4次札幌市生涯学習推進構想に向けて」について
- ・テーマ設定の背景や理由について
- ・令和7年度を中心とする協議スケジュール案について

イ 札幌市生涯学習推進構想について、資料2「札幌市生涯学習推進構想について」を用いて説明（早坂係長）

以下、説明の要旨

- ・札幌市生涯学習推進構想の概要
- ・第3次生涯学習推進構想の構成について
- ・第4次生涯学習推進構想に向けた視点について
- ・札幌市生涯学習推進構想策定に向けたスケジュールについて

ウ 主な質疑応答・意見

→異議なし（全委員）

エ 協議テーマの補足説明として、資料3「生涯学習と社会教育について」を用いて解説（出口議長）

以下、解説の要旨

- ・生涯学習と教育について
- ・狭義の社会教育と広義の社会教育について

オ 熟議

今年度も2グループに分かれて、熟議を行う。最後に熟議の内容を各グループでまとめた上で発表し、全体で共有する。（出口議長）

(ア) グループ構成

- ・出口議長、船着委員、榊委員、中野委員、細川委員
- ・片岡副議長、高原委員、今泉委員、桑原委員、齋藤委員

(イ) 熟議テーマ

「あなたの思う、生涯学習について」

→委員がそれぞれの立場で感じている生涯学習のイメージ、在り方や課題感等含め協議すること

(5) 協議事項（熟議概要）

ア 出口議長班

- ・ちえりあ、コミュニティセンター、区民センター、市民会館、町民会館があるが、その違いがあまりよく分からない。役割を整理する必要があるのではないか。（出口議長）
- ・札幌市の公民館は月寒にこそあるものの、数が少ない。（榊委員）

- ・社会教育の原点は公民館だと思う。地域で気軽に話したり、愚痴を言い合ったり、お茶を飲みに来たり、そういうたまり場みたいなところから知らない内に、社会課題のような共通の課題に結びついてきて、結果的に社会活動につながった、みたいなものが社会教育だと思う。それをできる場が札幌にはないと思う。区民センター等に色々なサークルがあるが、どれも既に出来上がっている組織になるので、引っ越してきた際に友達が欲しい、何かやりたいと思った時に、既存のサークルには入りづらいと思う。そういう時に公民館に行き専門員に相談して、「このサークルはどうだろう」といった、導いてくれるような役割を果たす場所が公民館だと思う。公民館が欲しい。（細川委員）
- ・札幌市の場合、自由に学べる施設はちえりあぐらいだと思う。（出口議長）
- ・社会福祉協議会や町内会、公民館も同じような講座をやっているが、それが組織だった形で、体系づけて行われているかは分からない。（中野委員）
- ・講座の存在を知っていたら行きたかったということが結構多いと思う。最近はSNSでの発信をきっかけに知ったというパターンもある。（細川委員）
- ・環境づくりが必要。学校職員を見ていると、学びたいと思ってもその時間が取れないことが多いと感じる。働いている人にとっても、業務後に行く余裕も含めて、時間的な環境づくりも合わせてしていかないと、場所や施設があっても、中々そこに気持ちが向けられない。（船着委員）
- ・行政は所管を分けて内部の役割を分担しているが、住民にとっては行きやすい施設、学びやすい施設であればいい。だから行政の所管に応じた施設の役割分担を考えなきゃいけないと思う。（出口議長）
- ・地区センターとまちづくりセンターとか。（榊委員）
- ・全区の区民センターや、手稲にはコミュニティセンターもある。（出口議長）
- ・札幌市の公民館が少ないのには、札幌独自の理由があるはず。それを紐解いて、新しい時代に合ったものを作っていく必要がある。（榊委員）
- ・月寒公民館は月寒村が吸収合併された時にあったものがそのまま残っている。だが、手稲村が吸収された時にあった公民館は、時間をおいてコミュニティセンターになった。なぜ月寒だけが残ったのかは定かではない。（出口議長）
- ・我々社会教育委員がもっと学ばないと、いい考えが出てこないと思う。（榊委員）
- ・社会教育法の解釈の仕方を、このご時世の中で変えるべきではないかと思う。学校教育における連携とはどこまでの範囲を指すのかが重要。少なくとも現代においては、より密接につながっていかなければならず、独立して別々に取り組むことには、恐らく限界があると思う。その上で課題となるのは教師の働き方改革だが、社会教育がその一部を補えるものでもあると感じる。それを機能させることによって、学校教育は質の高いものになっていく。（中野委員）
- ・学校教育の中に地域企業が協力してくださって、子どもたちに直接教えるような学習がたくさんあり、子どもはもちろん、先生や企業にとっても充実したものとなっている。この部分は連携が多くなってきているし、大事になってきていると思う。ただ、どのようにつながるのか、それを安定させられるような仕組みづくりの一つがCSかもしれない。（船着委員）
- ・学社連携、学社融合という議論もあったが、今はそれ以上に両者が関わってきているのだと思う。（出口議長）
- ・学校教育と社会教育のベストミックス。これをうまく相乗効果として推進することが、両方にとって「Win-Win」になっていく。ここは学社連携・協働から更に上のステージで考えていかなければならない。（中野委員）

- ・浦河では、高校が無くなってしまわないように、特色のある教育を行おうと地域の方が非常に協力している。地域と学校が持ちつ持たれつとなる関係性があると思う。札幌の場合、同様の事態はあまりないと思うが、お互いのモチベーションをどう生み出すかについては、これからも勉強していきたい。（細川委員）
- ・例えば、札幌の場合は平均寿命もさることながら、健康寿命が極めて低い。将来の生きがいのようなことを考えたとき、社会教育即ち教育委員会だけではなく、ウェルネス推進部のような他部署との連携、いわゆる総合政策としての連携は重要だと思う。（中野委員）
- ・ピンピンコロリをするためには、せっかく学んだことをそのままにせず、学んだ成果を生かす場が必要。学んだことをボランティアや地域活動で、生かす場をどうやって作っていくかが大事。（出口議長）
- ・社会教育士の資格を取った人たちが活躍できるような社会環境が必要。言わば学びのコーディネーターのような、少し困ったことがあったら相談できるような窓口という感覚。（榊委員）
- ・社会教育士は、大学で所定の単位を取ると与えられる称号のこと。その上で配属になった人たちが社会教育主事となる。つまり行政の職員。（榊委員）
- ・その社会教育主事が様々なことに関わって進める役目をもつ。ただ社会教育士については、行政上の役目がない状況。行政の行うことが狭義の社会教育だとすると、社会教育士は広義に関わる位置づけになる。そう考えると、この人たちに何かをしてもらうことは、恐らく行政の仕組み外のことになるのではないかと。（出口議長）
- ・せっかく勉強して称号も得ているのに勿体ないと思う。（榊委員）
- ・大学生の方々が将来的に目指す職業に、色んな形でアウトリーチのものが入ってくる現状を考えると、社会教育はプラスにはたらくと思う。（中野委員）
- ・行政が設置する公民館や施設は、その職員という位置づけで資格があったが、いざ範囲が広がってくるとどこまでカバーするのかということ。（出口議長）
- ・社会教育をしっかりと理解いただきながら、より良い生活を持続できるような人々を作っていくために、何か講座・イベントやサークル活動をやること以上に、社会教育に寄与いただける人材を育てるということは凄く大切になってくると思う。（中野委員）
- ・学校教育の中でも、自分で課題を見つけ解決に向けて行動するという課題探究的な学習を推進しているが、それは大人になっても学びたいという人を育てるベースになる。学校教育との連携については、先程の社会教育人材がつかないでくれば、より広く学校が開かれると思う。人材の活躍の場にもなるため、そういう意味でもつなぎ手が欲しい。（船着委員）
- ・羅臼町が行っている知床学という活動では、社会教育主事が間に入り、コーディネーターによって漁師達とつながっている。（細川委員）
- ・札幌市全体では大規模になるため、学校や地域単位でそういう方がつかないでくだと、色んな学びの場が広がる上、人材の活躍の場にもなる。（船着委員）
- ・札幌市では色んな活動が行われていて団体もたくさんある。凄く資源が豊富で充実した街だと思う。既存の活動を生かし連携して、もっとみんなが活躍できるような場を作っていけたらいい。（細川委員）
- ・福岡県や山口県、愛媛県でNPO活動も含め、それぞれの地域活動を発表する場が設けられている。そういう場を北海道でも作りたいと思っているができていない。他の人達からすれば、それぞれが何をやっているかがまずわからないので、お互いに知り合って他の活動の参考にしつつ、同じだったら一緒にやる、似たこ

- とだったら一緒にやる、そういうきっかけもあっていいと思う。（出口議長）
- ・例えば札幌だとどういう場所が想定できますか。（榊委員）
 - ・規模にもよるが、青少年の家のような場所。そういう情報交換の場を作らないと、恐らくつながらない。（出口議長）
 - ・情報交換を通して、今まで話していない人とつながることもできるので、新たな活動を知ってそこに参加するということもできる。活動がつながって循環していくイメージ。（榊委員）
 - ・先月、社全協の大会（8月23、24日「第64回社会教育研究全国集会」恵庭市）が2日間あり、文教大で全会500人、事例が50～60程紹介された。（出口議長）
 - ・2008年に北海学園大学で全国集会をやってから、北海道社会教育フォーラムが何年か続いたが、コロナで残念ながら無くなってしまった。（細川委員）
 - ・続けていくとなると結構大変なので、あまり負担にならない程度に楽しみながら進められればいいのかもしい。（榊委員）
 - ・任意団体や有志でやっていると継続が難しい。福岡県で集会が続くのは行政が主催しているからだと思う。（出口議長）
 - ・社会教育委員も座学で話し合うだけではなく、これからはアクティブに実際の活動をしていく方がいいのだと思う。（榊委員）
 - ・社会教育委員の役割に関する議論もある。過去の話だが、恵庭市では社会福祉事業の評価をするにあたり、社会教育委員が事業を見学して評価していた。（出口議長）
 - ・札幌市の社会教育委員はこのような形式だが、恵庭と石狩は全然異なる上、その他の自治体を見ると目からウロコが落ちる。違う自治体の色んなあり方を勉強する必要がある。（榊委員）
 - ・民間との連携について、今、各企業は考え方が変わってきていて、パーパス経営という、自社の存在意義を示すことを重要視している。そのため、民間の知見を活用しながら、実施する事業の中に導入することは極めて有効だと思う。札幌市の場合、ウェルネス推進部で行うイベントや活動については必ず各企業様とタイアップする形式になっているため、実施される社会教育の中に、常に企業がストックされている。それを生かし、課題やテーマに合わせて様々な企業と協力する形式も1つあり得ると感じる。（中野委員）
 - ・社会課題の解決や社会課題に向き合うために生涯学習を行うことは、本末転倒だと思う。まず自由に、一人一人が自分の権利（日本国憲法で保障された基本的人権）を大切にするために行うものだとすることを大切にしたい。また、どこにいても誰でもできるのが生涯学習であると思う。（細川委員）
 - ・首長部局のやる講座は単発でいいと思うが、社会教育においては継続性や人の横のつながりを作れるような、社会教育にしかできないものにしていくことが重要。（細川委員）
 - ・社会教育士は大人だけでなく、子どもでもなれる制度を作るべきだという意見を聞いたことがある。ユース・ヤング社会教育士という考え方について、島根県の浜田市では「語り場」というところで小学生に対して中学生が教えるという活動が行われていて、これが非常に上手く機能しており地元に対する帰属意識も高いと聞いている。（中野委員）

イ 片岡副議長班

- ・学校で学んだり、生涯学習で学んだりすることは単発で終わりがちだと思う。ネットで調べて分かったつもりになる一方、世の中は動き続けるので、ちゃんと

- 学び続けることを意識できる生涯学習がいいと思う。（片岡副議長）
- ・義務教育は必ず学校に行かなければならないものであるが、生涯学習とは、その義務教育を終えても自ら学び続けられる利点がある。（齋藤委員）
 - ・使わなくなった教科書を捨ててしまう学生が多い。学生には残像を残すようにと伝えているが、一度学んだことを新聞記事などを見て想起し、そこから学びが続いてくれればいいが、中々難しいと感じている。（片岡副議長）
 - ・私は、学ぶということは生きるための必需品だと感じている。年齢・ライフステージに合わせた学びが必要。子育てについても、その時に感じないと分からないことが多いが、そこで新たに学ぶことで自分も成長していける。そういう意味で生涯学習は必需品だと感じている。（桑原委員）
 - ・健康に少し不安を覚えた時、どうウォーキングすれば効果があるのか考えることに近いと思う。（片岡副議長）
 - ・普段、自分が接している人々の中に若年出産や予期せぬ妊娠からの出産をしている方々がいる。そういう人達の中で、出産後の復学や高卒認定を望む人達、看護学校や准看護学校に通ったり働きながら子育てをする人達がいる。彼女たちのように、自分らしさの獲得や自己実現につながるような生涯学習となればとてもいいものだと思う。（今泉委員）
 - ・そういった厳しい条件にある人たちこそ、どのように生涯学習へアクセスできるかということが大切。（片岡副議長）
 - ・傷ついたことの方が多い人生を歩んできた人たちが、自分で何かを獲得できる経験は、その人の大きな自信や前を向くきっかけにつながる。社会でそのサポートが出来れば、すごくいい。（今泉委員）
 - ・私は逆に学習ではないことがあるのだろうかと思うことがある。家庭でも子どもたちから学ぶことがあるし、PTAで様々な立場の方から学ぶこともある。この会議でも皆さんのご意見から学ぶことがあって、逆に学ばない時って何だろうと思う。生涯学習と銘打たれているが、生活の全て、つまり人生自体が学びではないかと考えることがある。（高原委員）
 - ・札幌市は非常に外国人の数が増えている。色んなバックグラウンドをもつ人が増えていく中で、全て行政がサポートできないにしても、市民が少しずつ関心を持つような雰囲気作りも施策としては大事だと思っている。（片岡副議長）
 - ・自分自身の子育ての経験から、一人で集中して学習できることがすごく大事だと思う。特定妊婦もそうだが、やはり子どもがいると勉強できないことが現実的にあると思う。一人の時間が常になく、学びから離れてしまうことも多くある。生涯学習を行う上で、自分に集中できることが一つ大事だと思う。（齋藤委員）
 - ・生涯学習にアクセスできる環境にあるかどうかは、本当に大事だと思う。気持ちはあっても体がついてこない、ということもある。（片岡副議長）
 - ・一般的に学習や教育というと学校教育が重視されており、それ以外にあたる生涯学習には、子育てが終わった後や趣味に時間を使える程生活に余裕がある人のイメージがある。本来は皆が人生を過ごす上で大切なものであるのだから、皆が必要として皆で行えるイメージになればいいと思う。（桑原委員）
 - ・本来、学校教育と社会教育は両輪であるべきだが、それぞれに課題がある。歴史を辿っていくと、社会教育は元々戦後の自由な学びをポイントとしていた。ただ示されたものだけを学ぶのではなく、自らの希望に合わせて、自由に学んだり読んだりできることが重要。しかし、生活環境次第では機能しないこともあるため、学ぶことは難しいと改めて思う。（片岡副議長）
 - ・スクールソーシャルワーカーをしていると、家庭教育の低下について教員から聞

くことがある。ご飯の食べ方や生活リズム、言葉の使い方などが独特な家庭があり、その文化に自負もある時、家庭教育を支えるような視点で生涯学習を活かせると思う。実際、道内には家業を重要視し、学校に行かなくても生きていけるという考え方が長く根付いている家庭もあると聞いている。そういった家庭に生涯学習を通して少し違う視点、違う文化を取り入れることで、子どもに選択肢が生まれるような考え方も大事だと思う。（今泉委員）

- ・長く続けていると、ずっとこれでいいと思ってしまう。学校教育にせよ社会教育にせよ、小さいところから少しずつ進めていくことが大事。（片岡副議長）
- ・学校にも時々顔を出していればいいと思われがちだが、本当にそれで十分なのかと思う。そういったときに学校教育ではない家庭教育という側面からアプローチするイメージが少しでもあればいいと思う。（今泉委員）
- ・言語は文化に通じると思う。職場では同質の人が集まるため楽だが、話が通じすぎて新しいものを入れる機会がない。一方で、私が関わっているPTAに行くと、色々な立場・考えを持っている方がいる。そのように、自分とはバックグラウンドが異なる人と交流する方が、色々なことを学ぶ機会が増えると思っている。生涯学習は余裕のある人が行っている、という話もあったが、同年代・同質の方が集まって学んでいるようなイメージもある。もう少し色々な立場の考え・バックグラウンドを持つ人が一緒に学習できるようになっていくと、より学習効果もあるのではないかな。（高原委員）
- ・議論を進める中で少しでも意見が分かされると、好き嫌いに転じてしまうことがある。だがそれはあくまで議論の範疇であって、人間性や性格とは関係ないと理解できるようになればいいと思う。英語でもよく口喧嘩があるが、意見や見方が違うだけということを知ってもらっては結構難しい。（片岡副議長）
- ・相手を尊重しながら議論することが大切。（高原委員）
- ・慮って発言することが大切だと感じている。（片岡副議長）
- ・生涯学習というと、生活に余裕ある人向けという印象があるが、そもそも学習というとハードルを高く感じる。PTAも社会教育団体として、保護者や教職員の学びのためという名目はあるが、講演会や研究大会が活動の中心である。しかし全ての活動がそうではなく、ただ話すだけでも学びはあると考えている。大勢を集める大会より、小さな茶話会のような集まりをいくつか設けて色々な人と交わる方が、お金もかからずハードルも低く、参加しやすいとも考えられる。計画や構想という規模で考えると、どうしても敷居が高くなる感覚もあるので、もっと気楽に参加できるようなものを検討できたらいい。（高原委員）
- ・カフェ等であれば、気軽に話ができる場になる。大学でも、教員同士の研修で学生の話をしてしながらランチを食べる場面がある。（片岡副議長）
- ・生涯学習が生活に余裕のある人向けというイメージは確かにあり、余暇のような印象がある。特に生涯学習センターでは、それまでキャリアを積んできた年配の方々が集まって勉強しているというイメージがあり、やはり現役で働いている方々には時間がないものと感じる。カフェのように気軽に集まり話せる場が増えると学びの機会も増加していく。それが本来の生涯学習のあり方だと改めて思う。（齋藤委員）
- ・やりたいことができると思う。最近、推し活という言葉が広まっているが、デュオリンゴ（語学学習アプリ）などで勉強して韓国語を話すことができる学生がいる。大学で英語を勉強しなくても、海外への道を進むことができるまでになるということ。BTS、SEVENTEENに会いに行くためにアルバイトをして学ぶ、凄いいことだと思う。楽しいということはやはり大事。楽しいからこそハードルが

高いけれど頑張れる。最初の入り口は楽しく、途中から少し頑張れるといいと思う。普段学生に教えていても、真面目な話をしすぎると難しいため、簡単な話から入って気がつけば難しい話につながるように考えている。学校教育にしても、生涯学習にしても、人が心を開くというのは、どういうところから始まるかということが大事。（片岡副議長）

- ・正しい情報を持っているということも大事だと思う。ネットで調べることも学習の一つだが、得た情報の正確さや誤った考えに至ることへの懸念、思い込みや洗脳のような状況になりかねないという危うさがある。実際、子育て中には困り事や悩み事について様々な勧誘が来る。そして意欲のある方が参加したときに、それが本当に正しい情報なのか、危ういものではないか、という声を聞くことがある。札幌市など公の場であれば、間違ったことはそうそうないと思うが、しっかりとした組織の、しっかりとした場所で学べるというのが、生涯学習の中でも大事なことになると思う。（齋藤委員）
- ・ネットで調べて分かった気になってしまうというのはこの時代の特徴だと思う。仮に正しい情報を得たとしても、時代は動き続けまた違う課題が待っていることもある。学生で言えば、就活を乗り越えても結局その会社がどうなるのかわからない。正解の向こうに出てくる揺らぎをどう受け止めるのかが本当に大事だと思う。絶えず学び続ける上で、誰かと一緒に学ぶことが大切だとよく感じる。楽しく迷えれば一番いいが、会社に入って余裕が無くなると辞めてしまう人がでてくる現状もある。支え合いが大事かもしれない。（片岡副議長）
- ・正しい情報について、ChatGPTがよく使われており、困ったら全部答えてくれるが、それを鵜呑みにしないための人と人のつながり、本当に相談できる人に聞ける人脈作り、人のつながりを大切にしていける生涯学習が大事だと思う。（桑原委員）
- ・この分野のことはこの人に聞けば大丈夫という、信頼できる人がいるといい。アメリカではコミュニティが小さい単位であるため、各地の教会を拠点に人々が互いを支え合っている。（片岡副議長）
- ・桑原委員が仰っていた、生涯学習から地域づくりにつながる内容は、本当にそうになっていけばいいと感じる。出口先生のお話でも、社会教育は一人で学ぶものではなく組織的な教育活動を指すとのことなので、自己学習ではなく組織的な社会教育活動が生涯学習でもあって、それがコミュニティづくりに派生していき、孤立しない社会につながっていくようなデザインはすごく素敵だと思う。（今泉委員）
- ・大学は敷居が高いという印象があり、身近に感じてもらうためにももう少しオープンにしたいと思っている。ゼミ合宿で函館の乳児院を訪問し色々なことを学んだ際、こういう組織・施設と大学がつながることができればいいと感じた。大学は地域と一緒に進めていくことが大事だと思っている。そういう意味では、生涯学習というのはきっかけとしても気になるところだと思う。（片岡副議長）
- ・人とのつながりは孤立を防げると思う。先日、親戚が孤独死をした。本人は70代だったがほぼ毎日ジムに通っていたため、同じ常連が本人の不在に気づき家族へ連絡したことで、とても短い期間で発見できた。一人暮らしだったため、誰ともつながっていなければ、ずっと気づかれなかったかもしれないと感じた。こういった年配の方たちに限らず、子育て中の方々が学習を通じてコミュニティを築くことで、孤立を防ぐ一つの方法になると思う。（齋藤委員）
- ・ポストに新聞が溜まっているとか、色々なきっかけで気づけばいいと思う。もみじ台団地では若い人や学生の住民が、街づくりを進める動きを起こしており、

まだ点の動きのみで十分ではないが、高齢化が進む現状にとっては良いことだと思う。（片岡副議長）

- ・先日、石川県でPTAの全国大会が行われ、浅野副知事の講演があったが、子どもと一緒に参加したPTAや地域のお祭りが理想的な防災訓練になっているとの話だった。実際、不測の事態や災害が発生した時に、周りが知らない人ばかりだと対応できないため、お祭り等の交流を通してお互いを知ること、有事の対応に生かされるという内容であった。やはり人のつながりが学習につながる部分もあるのだろうと思った。（高原委員）
- ・今日は丁度防災の日ということで、数年前には台風に続いてブラックアウトがあった。忘れた頃にやってくるというものなので気をつけたい。最近は花火が高騰したこともあり、休止する町内の花火大会も増えてきている。色々な意味でお祭りの形も考えなければならなくなった。（片岡副議長）
- ・自分の町内会は、やはり運営が大変なのか、お祭りを無くす代わりに子どもたちに花火を配ったり、図書券を配ったりしている。（高原委員）
- ・ちなみに、花火は今どこでできるだろう？（今泉委員）
- ・昔に比べて厳しくなったと感じる。（片岡副議長）
- ・自宅前では中々できない。（高原委員）
- ・子どもの時は生活道路がある程度あり、そこでできたが今は禁止されている。（今泉委員）
- ・誰かに気を使って遠慮してしまう。（高原委員）
- ・近所の公園は基本的に火気厳禁で、川沿いでの花火は目にする。（齋藤委員）
- ・高校や大学では後夜祭でよく打ち上げていて、逆に少し際立ってきていると思う。しかし、大規模なものだけではなく、やはり小規模でも実施できた方が良いと感じる。（片岡副議長）
- ・やはり周辺地域と住民を知らなければ、有事の際に助け合うのは中々難しいように感じる。（高原委員）。
- ・目指すものとして、生涯学習は個人的なものでなく、地域を作るといような、孤立を防いで仲間づくりをすることに派生していけると素敵だと感じた。最初に高原委員がおっしゃったように、全てを学びの機会として活用できるという意識が、日常生活や人との関わりを含めて、学びによりつながっていくと感じる。その意識を生涯学習という言葉の中に入れられれば、もう少しハードルが下がると思う。（今泉委員）
- ・先日、清田区のとある病院が交通機関と提携して、区内を巡回する送迎バスのようなものを作っていることを知り、やはりアイデアをもつ人はいるものだと感じた。自分がテレビでそれを知ったように、各メディアの報道により見える化することは大事だと感じた。地下鉄がすぐに延伸されるとは思っていないが、生活していくという意味では、病院にアクセスできるというのは大きいと感じている。（片岡副議長）
- ・人のつながりは大切で、古き良き枠組みの中で支え合いながらPTAも進んでいる。しかし、PTAでは次の担い手がいなく、町内会等でも高齢化により人手不足になったりと課題に直面しているところがある。人手不足にならず循環できる仕組み、人とのつながりができるものがこの先必要なのではないかなと思う。（桑原委員）
- ・アメリカでもPTAは多くの学校で導入されているが、十年程前からはPTO（Parent Teacher Organization）という、学校単位で親と教員の関係を作るような取組が行われている。全米規模の大きな組織と並存しつつ、実際にはローカル

なコミュニティで、親と地域が連携して活動している。皆学校のことを伝えたいという気持ちはあるため、どういう形で生かしていくのかという問題は、色々と考えていかなければならないと思う。先生方のPTAへの協力について、学校によって違うものなのだろうか。（片岡副議長）

- ・全然異なる。（高原委員）
- ・それは学年によっても異なるのだろうか。（片岡副議長）
- ・学校の先生という意味で言うと、基本的にPTAに関わるのは校長先生や教頭先生、PTA担当であるため、その中でPTA自体にあまり良い印象を持っていない方がいらっしやると、協力が得られず交流も生まれない場合がある。（高原委員）
- ・やはり人の問題が大きいということもある。（片岡副議長）
- ・人によるものだと思う。（高原委員）
- ・担当の先生によって、去年まで大丈夫だったものの取扱いが変わってしまうこともある。（桑原委員）
- ・引き継ぎが十分に行われないということもある。（片岡副議長）
- ・クラス担任の先生は基本的に保護者に対して協力的であることが多く、管理職の先生の考え方が大きな影響を及ぼす場合がある。（高原委員）
- ・校長先生の人柄も影響しているように思われるため、中々難しいところ。大人の事情があるかと思う。（片岡副議長）
- ・そこには確固たる考え方があるからだと思うので、一概に否定するものでもないと思う。（高原委員）
- ・別の部分に力を入れたいという焦点の方もいる。（片岡副議長）
- ・大学にも保護者会のようなものがあり、そこで父母懇談会をするが、やはり親と話すことはすごく大事だと思う。立場の異なる人々で手を取り合っていくためには、どう楽しく学んでいくか、に尽きると感じる。それが結果的に子どもたちのため、街のためになるといいと思う。少しハードルを高くして関係人口という観点から考えると、札幌も人口減が予測される中で、札幌に住まないまでも魅力を感じ、札幌の生涯学習講座を受けたいとか、札幌の児童会館に行かせたいと考える親が増えることが重要で、それをどうリードしていくかは行政として大事な部分だと思う。札幌市としての方針が出来た後、周辺自治体と共に手を取りつつ進められればより良いと考えている。（片岡副議長）
- ・家庭教育学級も中々人数が集まらず、運営の危機を迎えつつある。やはりボランティアのようなイメージが強く、多忙ながらも半ば自己犠牲のように参加するという印象が強くなっている。自己研鑽として参加するメリットが大きいことが伝わらないと、生涯学習は進まないと感じている。先程の推し活のように、コミュニティの構築や、先生とのコミュニケーション、保護者同士の横のつながりのようなメリットや楽しさを感じられないと、中々踏み込めないと思う。生涯学習に取り組むことのメリットが伝わるのが大切だと考えている。学ぶ必要性を感じていない人たちがどうしても多く、いざやると楽しいことや良いこともたくさんあるのに勿体ないと感じる。（齋藤委員）
- ・そう考えると、巻き込む力が大事だと思う。ちょっとやってみようよと声をかけることが大切で、少しずつ小さいことから始めるのが重要だと感じる。身近な隣人をきっかけにしたり、些細なところからつながりを作るのも良いと思う。（片岡副議長）
- ・まとめとして、自然体で「あっ学びがあった」のようになることが理想的ではありつつ、お祭りのような取組を通じて人のつながりを可視化することも大事。そ

の時には、忙しい人や生活が厳しい人等様々な方に配慮しつつ、色々な仕掛けを進め、それが活動や札幌市の魅力になればいいと考える。（片岡副議長）

- ・生涯学習はやはり本当に時間のある人が行うもの、というハードルの高いイメージがあるが、実際は異なることをいかに広められるかが重要だと思う。それを実現するには大変なことが多いと思うが、行政の力を借りつつ、皆で学べるようになれば、市民全体の豊かさの向上につながれると考えている。（齋藤委員）
- ・マラソンを見て勇気をもらうように、生涯学習は色んな形で人に何かやってみようという機会を与えられると思う。人の意見を入れて試しながら、少しずつ柔軟に修正していくといいと思う。最終的には、息を吸うように学び続けていることを自覚できるといいと思う。（片岡副議長）
- ・「普段は気づいていないけど、自然と行っているあなたの生涯学習とはなんですか」と聞くと気づいていただけるのだろうか。（桑原委員）
- ・推し活ですら生涯学習といえるのだから、認識が変わることもあり得ると思う。（齋藤委員）
- ・「推し」生涯学習まで行かずとも、アクセスすれば自分含めた周りも少し幸せにできる、決して一人ではない学び。社会教育は集団的に学ぶものであるので、自分だけではなく、仲間と共に少し知識をつけるだけでもいいと思う。（片岡副議長）
- ・そういう意味でも、学ぶ人が次は教える人になる、という構図があるといい。（高原委員）
- ・テスト前に苦手な人に対して教えることで、教える側も言葉の整理ができるという人もいる。（片岡副議長）
- ・PTAにおいても、役員が学んだことをそれぞれの単位PTAに還元するということはよく言われており、そうやって伝播していくことも重要だと感じる。（高原委員）
- ・役員の任期を考えて、後任や若い方々に学びを伝えることを意識されながら話しているのだろうか。（片岡副議長）
- ・全員が講演会や大会に参加できるわけではないため、代表として参加するからには、学んだことや聞いた内容をなるべく多くの人に伝えるよう心がけている。（高原委員）
- ・生涯学習は人生の選択肢を増やすということもあると思う。（齋藤委員）
- ・まとめだが、これまでの議論の流れとしては、生涯学習のハードルを低くして、色んな学びを皆で楽しめるようになると良い、仲間づくりや地域づくりが札幌市へつながっていくと良い、というものだと思う。（今泉委員）
- ・次第に対人関係が濃厚になり、人のつながりが巡り巡って伝播していくということだと思う。（片岡副議長）
- ・リカレント教育とよく言われているが、実際の現場から見るとどのような状況なのだろうか。（高原委員）
- ・リカレント教育は語学分野に多いと思うが、最近は教師のリカレント教育を大学で考えている。学生・子どもに対する理解が難しい、親との関係というのも難しい、だから教員の頭を少し整理する必要があると考えている。（片岡副議長）
- ・参加者は多いのだろうか。（高原委員）
- ・いや、現場が多忙であり、むしろ大学側が来てほしいと思われているのではないだろうか。（片岡副議長）
- ・以前、教員免許の更新の際、こういう機会こそ学び直しの機会であれば良かったと感じた。しかし実費な上に拘束時間も長い状況。（齋藤委員）

- ・教員が不足し札幌も厳しい状況にあると感じている。教員の仕事はブラックだと言われているが、どの仕事も大変だと思う。だから、そういう現状が分かるような機会はもう少し提供しなければならないと、個人的に思っている。（片岡副議長）
- ・学ぶ機会を確保できるように考えられればいいと思う。親が勉強したいと思った時、ショートステイ等で気軽に子どもを預けられるような環境が必要になるため、そこをサポートできる体制がないと、モチベーションも上がらないと思う。（今泉委員）
- ・罪悪感を伴ったまま子どもを預け、自分が勉強することは絶対できないと思う。（桑原委員）
- ・罪悪感を持たずに、自分のことができる時間の確保は必要だと思う。（齋藤委員）
- ・保育園に入るために、そもそも働かなければいけないということもある。こういった問題は様々な要素が絡むため、他部署と連携しながら進める必要があると思う。（片岡副議長）
- ・子育て中でも、親が勉強している姿を子どもに見せられれば、大人になっても勉強を続けることは当たり前だという意識を見せられると思う。（齋藤委員）
- ・いい世代間連鎖だと思う。（今泉委員）
- ・学校教育が大変な地域も多いと聞いている。地域ごとに親の理解度やネグレクトの状況も異なる中で学校も大変だと思うが、各校ごとにどう少しずつ広げ、どう高めていくのかというのが大事な課題。学校現場では管理職をやりたがらない人も増加していると聞く。（片岡副議長）
- ・地区によって多子世帯も多かったりする。（今泉委員）
- ・自分も過去に、中学校で教員をしていた経験があるが、家庭ごとに色々な生活があるため、一概に勉強させなさいと親に伝えることは中々厳しい。まずは挨拶だけでも、できるところから取組むことが大事。ゴールまで行けなくても大丈夫だと思う。（片岡副議長）
- ・子育てについて、検診の時は子どもを連れて相談したり話を聞くため、子どもが泣いてしまったりすると中々頭に入らないことが多い。保健師と話す間でも子どもを預けられれば、理解度も変わってくるはずなのだが、やはり人手不足のため実現しなかった。他にも色んな講座が母子同室のものばかりで、稀に託児付きのものもあるが、大人気で予約が埋まってしまうことが多い。（齋藤委員）

ウ 各班からの発表

（ア）出口議長班

- ・まず、札幌市には色々な施設がある中で、それぞれどんな違いがあるのかという話があった。所管の違いもあり、住民にとって分かりにくいのではないかという意見があった。役割は分担すべきだと思うが、1つ1つ整理して考えていくと、学べる施設が少ないと感じる。札幌市の場合、特に公民館は一館しかなく、なぜ一館だけなのか、もっと地域で気軽に話せるような場が必要なのではないか、そういった部分を歴史から紐解けるのではないかと思う。住民にとっては、どの施設がどこの所管なのかは関係なく、自由に使えて、自由に学べて、気軽に集まれる場所があることが重要という風に考えると、各施設をより使いやすく整理していくべきなのではないかと感じた。

次に、NPOや市民団体で行われている既存の活動について、それらを知ってもらい生かすためには、事例発表の場が重要であると思う。福岡や山口、愛媛では

長く続いているものがあるが、北海道にはそういった機会が無い状況であるため、ちえりあの1事業にできるのではないかと考えている。

また、そもそも社会教育委員としてどこまで関わっていいのか、何ができるのかという部分が明らかになっていない。全国各自治体で社会教育委員会が設けられているが、恐らくそれぞれの活動は異なる。そういった情報を集め、我々もアクティブに行動したいという話が出たところ。ちなみに恵庭市は、社会教育事業の評価を社会教育委員が行い、委員は実際に事業を視察するという取り組みを行っていたと聞いている。会議をやるだけが社会教育委員ではないということを改めて思っている。

社会教育士について、熟議前の私の説明でも申し上げた通り、あくまで行政が行う社会教育を我々が議論するという位置づけで言うと、社会教育士の存在が行政の一部ではない現状があるため、この方々が活躍できる場について我々が何か提案できないだろうかと思うところ。社会教育士が中心になり、NPOや市民団体と関わりながら、学びたい人に対しどうサポートしていくのかということが、これから考えていかなければいけないことだと思う。

それからもう一つ、学校・家庭・地域の連携、それから民間企業との連携というつながりそのものを大切にしていくなさという話も出ている。高齢者への施策や健康寿命の延伸を例に考えると、学んだ成果を生かしていくことが必要だと思う。生涯学習・社会教育の講座を受けた人たちは、学ぶことが目的になってしまっていないかを感じる。学んだ成果を生かそうとすると、それはボランティア活動であったり地域の自治体や自治会の活動にもつながるため、そういった場で生かせるような取組が必要だと思う。学んだ成果を生かす場が少ないのではないかという話も出たところ。（出口議長）

（イ）片岡副議長班

- ・まず、基盤として生きていること自体が学びであるという話が出た。その上で生涯学習へのアクセスを考えた時、色んな事情を抱える人々に対して、生涯学習だけでなく生活支援のような観点も踏まえ、他分野や他領域と提携しながら少しずつボトムアップしていくことが大事だと思っている。

また、先程の出口委員も仰っていたように、学校教育や生涯学習、社会教育、家庭教育の連携という課題について、中々難しいものではあるが、少しずつ可能な範囲で学んだり、提携したり、お互いに情報を共有していくことが大事だと思う。

担い手作りに関わって、そもそも学ぶことは楽しいものであるため、義務感をもってPTA等に参加するよりも、そこで何か新しい出会いや視野を広げる学びがあるという前向きな意味で捉えてもらうための努力を、行政の力を借りながら進めていくことが大切だと思う。

関係人口という点から、札幌市の生涯学習に関わる取組が他の市町村から少しでも羨ましがられるということは大事だと思う。札幌市の施策が魅力的に映り、他都市が視察に来る可能性も秘めていると思うので、新たな構想を立てていく時に、色々な知恵と現場の視察を通してブラッシュアップし、より良いものに貢献できればと思っている。（片岡副議長）

（6）連絡事項

次回会議は11月20日（木）15：00から、4階委員会会議室で開催する。また、会議の内容については、改めて事務局から連絡する。